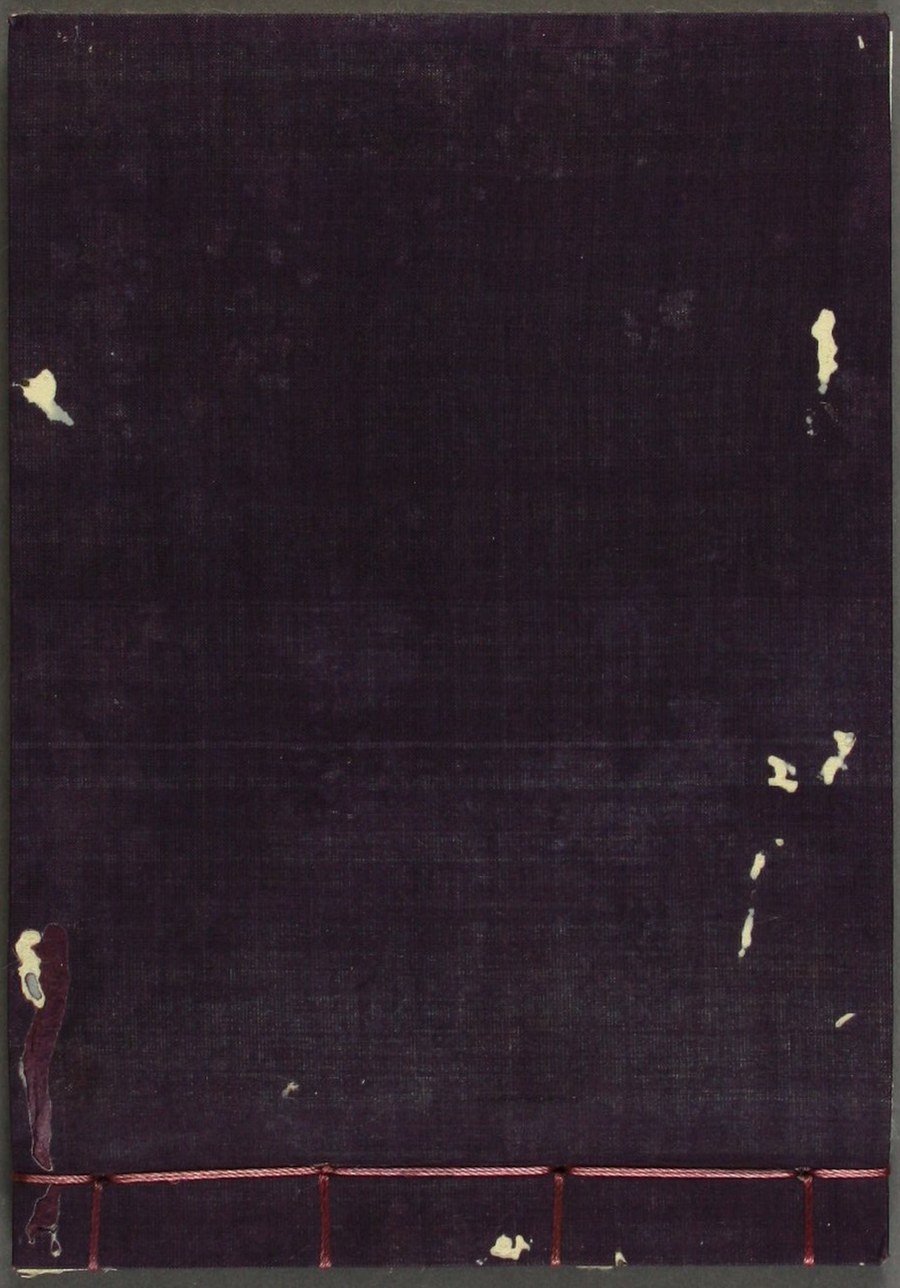


本

乾隆御覽之寶

椎の実　拾ふ子名
立ちむ老ひ　椎の
むかしを偲ぶ
はるを菫　天二年の春より
次年廿三年の夏月乃
事面目

まちもの

白河院宮宿所にて御
也
宇治のほとりに
南都下向の人宇治を
中宿にも御宿所なり
も平等院にて仏像の事
あるも
吾妻八宮の姫君にて
とかくしく御ものよりて
御ものもの
うめといふ物も
中うめといふ里の若い古
々の物かぶせとうたふを
うち橋ぶとよめるぶとう
ていふも
なるべしとうたふ
姫君の物もかくかく思
給もそもそもの事と宮子
也也
六条院よりわたりて

河原左大臣融公の別業
宇治にあり陽成天皇之
ゝくはしくはおもしはり
宇治殿と云ふ也宇治殿
朱雀院とも領し給
不也第五平四位より出羽
ありけるを事申給へ
天皇六条左大臣雅信公乃
不領給しと長徳三年
十月の比出家と
比也

買ひ取りて第五年冬
宇治の家をむしろ造り
ありき宇治関白の代より
早て永第七年より寺を
かまへて法花三昧を修
られ平等院と云ふ也
治暦二年より行幸あり
と云ふ長氏の長者のみ
六条左大臣より也
また宇治殿関白
ふくしまと云ふ

行ありてといふも所行也
源氏よりわかれ夕霧の侍領あり
也八宮のおもてをもて和川はは
と南の方也はつ和川のむこ也
宮ちかくもてなさ南く
夕霧のおもてあてと白宮
冷泉よりおほせ也
ひかのきんゐ夕霧ゐ
ゐも
下いて六条御の装束あく

生長しの所也
こゝろくらくあぐのきん
圍碁竟碁師を
雙六自天竺都て天竺
持統天皇二年禁制
弾碁後漢書梁冀伝弾碁
藝経弾碁人射局弱を
弾碁ハすの碁とそぐく也
水のそとももてそめて
ゐくよりの山川のもとを取は
わの絲すもつひをる
へ〜

のひ[illegible]の宮ゐも
八宮也川をてそそちも
ふえをいとをかしう
薫の君也
いとをかしき事よ　源氏物語
八宮也ものうらうらく
見あるき給へ
ちのおとゝの　薫の君也
古歌仕のあとゝの　哥ゐ
ゐるも也　柏木よ　同物語

おぼしたいちいき
八宮の古宮也　薫を聞ゐ
ものゝ宮也
けも思ふ所　薫けも
思ふ所　きも　けもい
けらもの也
ものゝ　其外の
いあさらん　八宮の君
しのもとも
つまとなる物語　八宮也

西の京なる　白宮の方也

ちるはちるあまたい

桜はく桜の山のはく苑

ちる桜あまたいはく桜あり

春風堤賞遍堤根縁

見商苑又苑苑

のそそひやまきのおきてちるひく

水の流

日本紀十五代宗天皇

ちるはくはくはくはく柳水あまた

ちるはくおきてはその称ありたる

六帖

ちるはくはくはくはく柳水あまた

おきてはしれしその称ありたる

幕末出そよ池の水を見

えそとあり水紀行よは

あまたを元宮宮ちひ花い

柳の水ようちうあ新色さ

あまたあとあかはくはく

只水そうりあそいるいあ

き苑

つまたあ宮ちひ　小宮ちひ

あるも

山風に露ふきおろす　八宮殿

如のちいてしらてもいか

波のてそいそるのちりとも

いいてそくおくへ吉つ連歌

もあるも

紙きんそそ　白宮のきん

こそ連句しかも

もものみきそそ

あるひ浪いてちるそそる

あるもり

中ねいすうしてそ　はるかに行よ

つもそ黄いふ系りかも

あそひないかれる　若宮連也

めんをいく　醒醒楽左京

くもいくくくとりもくんあるそ

あり河水楽　壹城紙元年

河の色の赤　連連ちれて国こ

そふそもあるより　あるん能

古事こ智月　くんをいくくとあり

巻尾字の張ん又御畳の席
に成解解系もそのようなる
ようあるもの但酒宴に管絃
坂を入てうり前は曲と賞
歌もんしとお坂もうり成
説よ以宰縣初度道遥や
やて唐系をひらくんも
ふう能えとうて頃も好
のそもてうち席系とあしもう
河水系うて方へきそも笑行
道

中村上皇紀恵和元年国司
十一日饗宴舟系養解解
楽舞人四人ことに按解解
系唐系也舟系ことに例
よもあるべしや
河海よ初度の道遥り
たの系めるこに系和て
無行の興いけ子曲
とみえてうこれ習可也
解の下ときれよいとうあ

如宮にてとあり 釋迦雄
酔ふよをあるん
少よのそもきこゆる
八宮の廊し
あいみさはてとよ
八宮の事也夕霧の領
ひかりなる 対てこいみとい
あ丹屏風 普賢の絵
代よりそなる屏風者
山居なるの方あるき絵

家長宮 実也深骨
作面をとりて絵組みて
用合ちわし簾屏風と
以ひあろの屏風と
以ひあん車ひあろい
作とりよきく曝てくと
多和しその絵のわん
清門て 如也あるき
ふ清をもあるへし
一ちてらのようちへ

打 楊人へ 一説地久破 同言
地言 秦双調
ちゝ人へ その母ちゝめ
たゝとも地りつゝ
ゝりこん やそよわ あもゝ
こんめそよわ 二段 ゝとそ
あもゝ いなあもつゝ
けすけつゝ ゝれて あもゝ
さゝてやそよわ あもゝ
秘 ゝゝあ やそよわ 提子系
ゝゝとい 楊人へ 呂系 双

調ゝを一越よわ
ゝゝ 楊人の調ゝその母
ちゝめとゝ ゝ調ゝちゝめ
いとめゝ ゝよとゝ調けて
食めそゝ
ゝゝのゝゝ
八宮地 地そのゝ
者ゝて及ゝ段
所ゝつゝ ゝゝあ
御宴 地

[illegible]めく　生孫は
[illegible]（孫）[illegible]そんとゝめく、
[illegible]の事ゝ[illegible]ことゝ日
[illegible]四位の[illegible]
四[illegible]ての様の者し
いと[illegible]
八宮を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
姫君の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

はつき林といふ寺あり
雲をもとそしも
引ものはかり
わきてもいつも何白ん秋のに
いつまでもかくひくお苑な
別当の山寺よりあり乃
ひさしく
宮ゆ川のせも　あの河ぶの
ものとうもそいつり宇治院
といふもとの西方ゆ遊河

角ゆてもきこゆる色
きこゆる色
とう大納言　紅梅大納言
紅梅殿をと大納言とも
きゆ寺と右大臣殿
見お梅中よりい次あれ
見てとり
宮ゆ又ゆ入きたいそも
寺ゆ地ゆ　みおそんれ
白宮いお　お浮も

かゝのもゆもまとのも
うハ結也ゆ丁とい和ら
男ゆ丁ゆもえいひゝす
白宮八宮へ男ゆ結ひび
より結さあとゆ丁ゆ
宮も野ゆ丁ゆへ
八宮ゆもはゝ寺地結て
山迄ゆしゝ結へも
中ゝゆもきゆきゆ
さもゆきゆとゆはゝもて

あゝゝゝのいゝゝきゆ
ていひる結ゆもゆ丁
ありもも
野もあゝゆ　年ゆきゆ
ゆもより年ゆゝ結ゆ
こゆんゝも
ひゆ丁い　ゆ和丁也
かゝゆ丁ゆもゆきゆ
うちゆもゆゝ結ゆ
かゝ山ゆもゆきゆ結也

ゆくすゑしく思ふには
なとさらなんとも
宮はとかく汲しこ
八宮此事に歎き給ひ
世に心をあはせねは
たえしも世にあつかる
給は栄花なきなり
いてくちいはそき
死期をといそかるなり
まくこの何ことくかな

八宮のかくれ給ひ給ひ乃
此流によるふていまたしき
なにもおもひきと給ふを
も此姫君たちの御事を
よいとくとくそけそひと
みちそ給へん仏心はこれ
なんとおもてすわさそなり
もとのまゝ也
御用をさ為にあつかるとも
此姫君たちの何かなるの

事也八宮の宮より十合より
事ありすぐしたまふも外戚
こゝろもしらぬ御の人のさ
實ようわうこきん人も多
思ひ給へたまふ
とハ八宮ハ知給ふ事にて
ゆゑ〳〵しと思ふ
紙
八宮の姫君ハ琴と薫
とうちわたりの御ことを
法文のまいりの所へ

出給ふ
よふもてつきの
一人〳〵ありつき給ひ
わたりてのまゝ
使宣のやうなる人
こゝ
自宮
その秋中納言
白宮
年也薫廿二才
いまゝ事と　實文と知

[illegible]

[illegible]ん　柏木の羅

[illegible]

のおい人　舟[illegible]た

[illegible]

[illegible]　八宮へ[illegible]

[illegible]

七月[illegible]　おとゝの秋

中納言よりとゝきて七月も

[illegible]

[illegible]

をも七月[illegible]

みやこに

松虫の初て忍ぶの秋風

[illegible]

[illegible]

きの山い宇治よりする

[illegible]

宮ばかりて　宇治よりして

[illegible]

きて八宮はかくて出家
のもとをおもひたちぬし
ひとことだにも口一言だに
もらすまじきものを
なれはてぬるかなしさ
ちりぬるをわかよたれか
世をのがれ　有てなきもの
出家の本をとりてとりて
入ぬるもの
よのつき月の

八宮のかくなりぬるを
て訪ひきこえ給ふ

八宮絵

この比の世い
なりてなりぬるを　宮中も
合三人宮中トコム
とりきすわも
宮の男方のよりとりて
とりて入いとをしく
ものをいふ
なりぬるもあり
なりぬるとのこと

人のきてゝ人をとゝ
行ゆくも無いすてあそひの
如とをゝ人の靴のつよ
ちるゝ物と人をとゝ
おそれも我心をあのことを
いそんとして書のあのことを
の物や
主はつゝ方のきるゝ
人のをとゝ
身も罪ゝ

このゝのこと
人のゝのゝ屋ゝ
子と主ゝ方ゝ
これゝ姫ゝ
の物や
無ゝ
ゝ無ゝ
大ゝ
世ゝ
いゝ

蓮の葉にあらしに
めをあはせと思ふる
ものを　蓮花寺
世中を思ひ捨てる和尚
自身のふるそいとあ
とを思ひ出てこそ
いとをしけれ
宮よりまいりたまふれと
姫君と筆とそ〳〵のこ
とも

ひ見つるもの
香山大樹緊那羅所作
お弾琴奏八方四
方吉乐迦葉尊者忘
國俗与龍華　出大樹緊那羅經法華
白中二巻
きもの迦葉も立
て舞しとも優婆塞な
對しその網有興
ふるくなる　おなしく
仮とそのふるの隔なく

いひつたへてきたれるも
はるのことなれば　中宮
おわします中宮第一皇子の
とうぐうなり
もちろんそのつぎめつる
この次ぎはいとうのきさき姫宮
のいなさまなるも
秋なれば
二とゝ第の皇子なれば
八宮のとうぐうなる成ぶ

第皇子にあまてらすもの名
をく一言いうそうしとも姫宮
のもとへこのゝ文紙にて
よきあつらへも
ゆうなるきさき　八宮のゆゑと
のことをのたまへも
いろんなかうかうをん
八宮をくさめてるもの
董宮しかるきさきをうりと
ゆうなるいとうるゆゑ

海はしあそびたる

もとの所と　七月十六日

同相撲呂浦也　古今内侍

小月　古今　呂合　小月　古今　古今　桜

出小月　古今　諸国の使の侍ども

あつめて召流さるる也　そこ也

召合後ろもとかりて召流あり

と桜出とそ

みとそそうる也のまつ人

弁君し

ぬしはいかに　姫君のの

西参也

ぬしはいかにとそ　八宮の方

よる也　結末のけそ乱れ

ぬよりも

そそ　そそ也　薄の下葉

ぬそていなすとも

思さ海まる結ん

人の物よこうるさんいさもこに

口惜うしんとも

異うらめ　秋初よ領し
ふかしも
ぬりもよ　八宮のおもと
よおぼしありしも
秋ふくるもすさまじ
八月も
思ひのまつる　雲の
金仙も
夜のてと　して　死別も
思ふさむうあはれなる

むも　は宮　姫君　こうあつ　今もしかなく
もなく
さめても
なるもの　これ　の
ほうよ　秋さへ　死のわして
ひとよんかと　ほとよく　姫君
ふるのうへと　思ひて　ひと
さもんうの事
死後の事も
ものの事　無ものも

[illegible]のよう[illegible]
[illegible]
山[illegible]
[illegible]
[illegible]一向[illegible]
[illegible]
[illegible]貧[illegible]
若[illegible]
[illegible]の教[illegible]
[illegible]教[illegible]

[illegible]
の[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

とと殿のやうに思ひきあ
ほまとの殿へ参らせく
おはせ
思ひよりて　八宮の御
心よりそ思ひて殿へ参せ
姫君にさも思ひきこえ
つゝき給ふ殿と　八宮の
心とゆくりなくつゝんとの
さあ殿と姫君ものの
おとりていうめしく御ふる

つきまも
あるに殿へんとて
阿闍梨のもとへ殿へ
わたくよりきまあるほ
ほもきゝ人の事のおとろ
常のまゐられそれ
ぬまも八宮御の人ぶれ
も人ふる宮とて行とも思
さまもまさきりて
殿へんいはもまも

初さひしく心細きうら淋しさ
この世の事なのうとましう思ふ
ばかりふかく恥辱はいあるも
思ふにこのうらくしき若なの
名ちやうやうなる法師の教
也貪いとの者といいて
きて入くも我ばかりもの
外聞も我ばかりもい内外よ
聞ちやうもまれも
おきくしく人めもん

富貴のかをもとめもと思
ふもそれは叶ふまじ人と
河よあひしら受領なの
ひうちこと中さいおきいし
くいあるなをもあるあ
まるれたまわこのまと思
かくうもとも
おきくしーんと思とも雖
叶ふまじ一向萬ちわう
きるまじ始まわうくく

[illegible]
おのづから[illegible]
八宮のもとよりとて[illegible]
[illegible]世をとをおぼえ
[illegible]
[illegible]事も思ひ
[illegible]勝の都も思ひ[illegible]
き事に思ひ入て[illegible]
ひとりゐ　大ぶい中[illegible]
思ひたまへと[illegible]ぬ

一人[illegible]
のおとゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]　死期の
[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]
[illegible]　[illegible]
病氣の[illegible]
[illegible]事　[illegible]

なきさへほとよくなきたる事
也
今これ思くらべて
人と云者は面々に宿世あ
まれはいかやうに覚ゆるも宿
世次第なりといへ共かけ給
てもなほさそくもひは
あまねく稚き思ひのまゝ
頼とならぬ
去年の志ゝく　比の方也

心よりまことはなとい
八宮の事を語りて姫君
たちかなしくなる也
かゝるときは涙もいつもの
丁 史記曰孝恵帝崩太后
哭泣不下
中 杜詩鷺定却拭涙あり
思あまりてるまゝには涙い
おちぬ物也
のちれほどにも　死後葬送

おのゝなけくへし
しほ〳〵とすこ〳〵と
あさましの中に御座也
日ころも又あひ給ひしき
八宮ハ此程迄ハ姫君ハ
ち人専念あか御さき事を
よく〳〵申さきうしとや
かうこそは御まとめ　姫君にも
もその思ひ給ひ給へともて
くすしく申なり

おいし御ぜう　八宮のその
御持方給の御座もあさ
世の中もうつり給ハ姫君
の御心はゝ御用意也
人の心はいハ　人の給て
姫君の御心と同居し給
もんやうもなき事なれども
其御心もうれしく存候乃
うらハ四月のさき世の思すさめ
に姫君の御心にそひおハ

[illegible]して死別の[illegible]
[illegible]八宮も[illegible]て[illegible]姫君
[illegible]も
中納言殿よりない　薫も
[illegible]のよう　世の[illegible]
[illegible]も
又あひ[illegible]と　[illegible]八宮
の[illegible]ことも
[illegible]
[illegible]

[illegible]と思ひ[illegible]と
[illegible]姫君[illegible]の
[illegible]も
[illegible]の後　[illegible]常の文
[illegible]の別さ[illegible]よ　八宮も
又すむ人[illegible]姫君[illegible]
[illegible]常の[illegible]
[illegible]も
神の[illegible]と　姫君[illegible]の
神の時[illegible]も

あるそひあるこのも
皆おなつきてあるもと
信をかけ具し
おるもの 所関係のさま
てい句編 はかれも清水
あるも

おもてうらい 八宮乃
信をあるも
おなつかるもれい 白宮
更しおるもの

その時く秋の山里
下ものあるて白宮のなるめ
紅葉も小萩か蕾さある
と庵の時秋の山里いの
かなも

あるその 夕の風
夏の月の 夜の風
の時節いなるものるも
ても世界の無常は思ひ
よるれなるあるるれも

宇治にとあさり　夜ゝは宿す
なりぬし事也
宇治てはまかせて　中君の
事也
やくのらおきみける也
御子よつもそ総角の心
うすくなりゆると、思ひね
なもサハ都鳥ちらしも
別のをとさりて歎の家也
もあるとを思ひなに別を聞き也

いそのかへりけん
夢の浮橋六帖の名
秋とこそ見よわ白居の後
よいそせ給ふ
我ならし　大君のうへの
ゑかゝいある孫とも中君の
事をもち孫給てまつりて
無年し給や
かうこのことよ奉つらぬ
左右(モロ)声(コエ)　歎　涙の勢也代宮

もろ〳〵ハ庶子庶男の総称
也下の心ハ我と庶とのもろ〳〵
と見也
私　このもろ〳〵と云下の心ハ太君と
中君とのもろ〳〵なるへきん
去りハ中君をとこそいひて
太君の無るや代筆ハ
あくさら能
くろきかミよ
黒紙　服者の料紙

あもよりいとあさきもの紙ゆれと
鳥縹　雪縹と　縹き也
又両種ともに用也あハ鳥紙
を用ゐるなるへし　あまより
て絹ちゝひあるや
清のくすを
ハ玄香銅云清のくすは
ゐ篠の生てき也
清のくすぬく清用物にて
赤し水をへ乱せるらん

乃の葉をとりあつめて
ちるかとそ見まとてもり
さ間や
ほのぼのとかんをとりあつめて
ぬるい中そのこの浜や
ちつとてもおもきおもしは
石使の物をとりあつめや
[illegible]
胡蝶よ友はともちも
[illegible]

友はともちる庵の前の
もちつ長い　きのふ新の庵
そもちつ長よりもあたに
ほもそいつて思ひいこと
おもをとる時きとも
あちりなきけりもも
時る迄なりて又迄ちい
いつとや
一とちつの　八宮也
思ちもちる一とつ

我人のかすまもあらぬ
八宮遺言をまもりて
ものをもいはず
この宮のもとに　白宮
はしより姫君をかたらひ申
あさましうもはべるかな
宮はいかにかくは
あさましかるべきことぞや
そのかたくなしく　白宮の
御ものをいはせまほし

ことをとりあつかひ申さん
姫君あるものの
いかにもいとくちをしきに
ものをいはせんとやは
おもふらむ　これいかにと
いかにもいとおもたき所
よりかのものをいはせ
ものあらばこそもいはせ
のうちとけて　えもいはぬ
よそをんなにものをいはせて

年ごとに見ぬ人や
まてとも見をさめやふ
蓬ふの花ひの餅
洞流めの毛実〻安
ひいなそくしも　五旬のいと
なるへし
東のひさしのくてらるるに
服者の餅本屋と長名
とも　礼記妻大記　海て
妻居信庵不遷寝苔松出

ふるくそなる　大君
むのしのひもをよ
うとくしめする
やとあるよあやしや
なるへしきてる
洞流めも人事をう
さまい人仏そなわ事無
法なるとや
あさ海う　大君の迎春や
生そめるとりの餅や

ことゝ事ぞ
あらや
月のけい　大君のうきと
そもちくあいてはよ
あめまよ立てつゝ柳
よりていると　とも
もいかし　紅ちくて　袖
もし　ゆくと　菖の
ゆくかもちく　菖の
いつもとあや

又はさるゝん　みな君の
いつ地もまてそなくさ
めんとや
宮にそ　ふもとく　樂
姫君のあり　さはと　菖の
結志濃　ゆくあり
らもとや
ものかたにても　大君の
と菖子　世よ　寄て
八宮の　ものとそとあり

のやうきは常にひとは思
なり給へしを
もてしねまりより給り
大慈悲をもてしねまりよ
足給つるは志ともこなり
給ふへし
御前さんさは　姫君達
の事を案して薫の
給や
又の給ひき申して

八宮の姫君たちの事を
薫の給ひときこえ
なれをとしもさ申たひ
思しきこしすへかりぬ
なるへし
申されとくもとろしく
きこえくい親疎しもとる
いくむつしき事なと
ちきさゆも私もろしき
とい風流めきかそゆきやう

〇きく

きくのあることは

もあり所る日比

菊の日比なのこと用る事

もあるもそのの日比を過

所るもこと所る雨をしめと

とふ心ん

枡たのこの用る事ハ所

所る日比と先ハ八宮の

菊のの花ときくまを

きくの大きの用るこ

あるこは比ハ紫いさしこと

ものこと句と切て

こうこきん

比紫野れ為稼一の味味

あるこの用る事ハも

あ日所る日比私のこ

ものこと句と切て

こうこ先八宮のこのこと

きくあるこもこれるを

ちのあゆりに面白く稚きを
見るにと姫君のうつくし
思ふ人の面影なつかしう
とおもふにも所詮言葉に
あり所なる日比てまたそのひと
うとましき日にと思ひ
とはん
かのうしあけくれ橋姫の
色のうつるあさちをそれも
黄ばみ色浅葱い菊の中
かたちうつくしう物思ひ
のとうとうそ袖のうへも
ぬれてと思やりある
思ふ深い服装の美しうる
色
色うつる紅をとる家の
大臣の遠き色紅い家乃
屋とりとりて我身は
とき所なすとて
うつくしう

苔衣をつゝみ兼ねたる
涙の玉ぬきとゝそなりける
ひきあつめたる みなと 菫の色
こゝろもきれいなるそうな
弁天の大黒を立てゝ
あるゝとこゝよりまつてゝ
むかしをとりきあつめ
相木ハ下ハ宮なるのもの
但ハ宮のむかしの事
ありかてゝ滅すき 相木

なるの事
ゝ花よおもれ 菫の須
六番花前の事
あるかゝ之つやゝる
八宮なるの沿信菫の
叶てさいりゝなるひ
ゝよ花ゝ道ゝ
八宮の墓古ゝ
菫の道世ゝ
ゝるゝて 姫君ゝ

[illegible]んとまをしんいをもつて
しき　姫君と萱の御
とのゝ御前のまをされ
給うとうとうとまをす
へし
の御ことあるべきなり　柏木殿も
八宮遠方や
四月朔日　柏木殿
おもとゝ給ふとうとうとまをされ
萱の御きとひ柏木殿

似るとや
この人いと毎度　柏木の
めとこゝも　はち宮の御方
とゝ給ふとゝも
のとのゝ　毎日　柏木
乳母死去　死去　致仕大臣の
方へうとくうとうとも
いとうとうとも　うとくあるも
むかしの御事は　柏木殿
姫君うとうとうとうとも

きさらぎ行くんかい
姫宮てらへまゐるとき行くん
哥
行くてもいととくても
萱の秋萩の露の行くても
相方のあるいととくても
又ちとさらるれて　ぱるとまを
姫宮てらへまゐるとそのあな
今ぬんい日町ぬんと
思ふ所　後ろとや

ちとい所あいと　ちとい
宮の行くと所も
とちとあるとも
秋わいとる　あくの日
秋とてそぬうちおや
恋いの人あいる
世とそ恋あるとき
ちとひそいる
月とも
石神とものくとも

火鉢備具さもさぶらひ
のすゝも
？海さすの人々も
法師さうさも
秋さ月のさびしさあるよ
草の宿さはらまきとみう
所と能よをてう
所のうこの朝寝さなの
思つきもあ世中のうさ
もりうすおしもかこも旅あ

うきてとかりくとあく
ていたりさも
宮おさも弥姫君の池
のすゝおさんとおぼさも
さもきたうこうも
姫君さもいと宮おて
海さあ姫よきまして
舞さや
いうまうあくく
白宮姫も艶よこの海き
あちこ

なるべき人の山里だにいと
遠きも斟酌あるや
かくあるべきなりけり海と
八宮の存命中よりの事
身無しとや
思ひさましつるに
さるべき世なれば
あるべしとやうに思てるとや
きてうとと思ひくるも
そなたより八宮のおぼし使
ひ
なる姫君の事をこの事とも
ひきもてるや八宮存命よりと
えうなきもあるべしと方
事行くものやふ
ひけるとや
見しうあるべきとき
八宮のおぼし侍あるべ
あるのわ思ましそひたるや
いまさらめて八宮のおぼし
めしやしてよるべきとも

[illegible]
あぶなてまたよあひ[illegible]
ハあるとき[illegible]や
あまてこのこひわひて
菓葉とともに[illegible]
もてるよるひ[illegible]
[illegible]の国梨の国八宮の在世
のるひや
[illegible]ハ宮の在
世のことくあり[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]宮の出家ありても在
世のいも
[illegible]
岩ぐも道ぞ[illegible]清濁
[illegible]中[illegible]
[illegible]国梨へと[illegible]
[illegible]大[illegible]の[illegible]
世よ[illegible]
[illegible]

ゆく山の松をよ消ぬ
松風と共に消ぬ
さて松の雪に消ぬとて
よつもりやもとゝ初も消
秋
みしの人のこゝろや
伊勢大神集に松の雪の
こゝろ有雪とうもて

紫式部

ゆく山風雪と共に消る雪よりも
我身世をうる程てもなきを

返し

消ぬ雪と命よりもはかなし
雪よりとこそ消る松の雪哉

作者の自分と用る事
歌字四帖よりさる元
歌字治代の歌百首異の
名を利用れ山城のと
仮も元の拾遺より入る元
百首と採用ていの事
思る所あるべし

[illegible]くて　[illegible]
[illegible]
[illegible]
中納言の君　年内よ
[illegible]
[illegible]
雪中の[illegible]の深切を
思ふ[illegible]
[illegible]
服[illegible]の綱[illegible]に思ふも

[illegible]と董の[illegible]出
[illegible]
思ふ[illegible]
思ひ[illegible]
[illegible]ふてのふ　董の[illegible]
[illegible]
野[illegible]
人の心[illegible]
[illegible]緣と[illegible]
[illegible]緣ある[illegible]

宮のいとあわゝしく
白宮こ
あそんなる　坂宮乃
遊言しそんめと事ゝ
白宮へ中てもあるゝ
みいとくるまき　又菫い
中さま祝ゝもあれな
のゝるわゝや
あくよるん　菫源平
なるゝしゝも

宗盛なるまわもゝ
菫のゝ宮ゝ
のゝゝや
宮のゝゝよるゝ
あゝ世ゝ里世ゝよあゝ
うゝんとのゝ人のゝゝん
引ゝのゝよゝあゝゝは宮
のゝ里ゝゝ人ゝ残ゝゝゝや
なるゝゝゝは　何ゝゝ
つゝゝくゝゝ居ゝゝや

なほさることなれと　白宮のは
よのつねよりも思ひまさるへき
侍りの女はころ／＼なりけり
まさなきことはめつらしうもて
なしおもしろき情のすゝめて
そゝろにしき方にいひのかれす
候
なに事もあるに　萬の書
事と始むるに先さきを
なりけるは猶さとしきん

すへて万事あるにさらひ
て和歌をよみてもよからぬ人
哥よみ人は智すく和歌よう
ある事にも　いのちんと思
なすて道の道は却て智すなる
めりまりやうもあらんと篇
あのまかあんかりもかゝらん
きさことまことしめさんと
心やすし　畢竟は是非とはれ
まつてなるへし
くるしそあそては

神ゐんこと[illegible]ん
三田のかの此のまきまる
これもよかつめ人のこと[illegible]あ
ぬまい又[illegible]と[illegible]ゐるも
私式[illegible]と[illegible]陸とゐんて
ゐるんめ[illegible]
私[illegible]きめ[illegible]ゐるあ
ぬ人の或いこ[illegible]てす
ゐ[illegible]ていい[illegible]神ゐる事
をいゐるん

[illegible]のふく[illegible]ゐる
おいい白宮[illegible]事も白宮の[illegible]
ふく[illegible]ゐ[illegible]
ゐるい白宮よ[illegible]
[illegible]きく人ゐ[illegible]く
[illegible]ゐる事い[illegible]
[illegible]事白宮の事を
世界よ[illegible]
人のこそ[illegible]
白宮の[illegible]と人[illegible]

行ふ給ふことをもとりて
申しつく　姫君の
のさまと聞ゆるそのほど
なりと源宰相の
きたりくてたてまつるも
ひろうの御ものとてもあり
姫君の御ものあるを若君と
そ菖蒲のもあとも
我ひとりのてい
姫君の御ものといふ

人の君ものきて　白宮のもを
中君の御ものはかりはあり
ものきて返答をんとあはせも
ものをくるよの御ものをくるよ
姫君の御ものをくるいの
御ものをくるいの
私我身なをもくるはなの
御ものをくるよりもて返答をき
やうなりと我身なをあるより
返答しをき

幾代宮の草子の詞とき給
つる程よりはじめて紙ぬりて
やうやうといとさて白宮の
事もいとかしこくまとも
ゐてこうつら
もとゆとりとなりて
はりぬきの小男のなりて
もてゆきてはしり
もの
ゆえ思ひ給へとまりて

草の白宮とて日記をかき
ものを志をとい大夫よりはしん
しあてしめやや
の宮ふよりとい　白宮の神
天よりふかをそと
のふのの行き所も
白宮は神天よりもとの
ひ井や白宮の宮殿
いさめそ人のまてて
つきてよりそれもきよ

[illegible]
白雲の海
大空の中天の白雲
[illegible]
大空白雲の海
[illegible]
雲の海の山の
別の[illegible]
白雲海
[illegible]

[illegible]
[illegible]
陳[illegible]
[illegible]
[illegible]
私[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
上[illegible]

わそこ色下白ハ白露より
も先祖をもとめてにけし也
川ともなるといふ人より年
さいつ古来移衣の方より
のちまへにあらさすしる
流る山部さへにある山谷の
あさくいふと思ふ物は
あさくは思ふてあるとや
影もなすまもしめりなりて
大君の記

二そなやふなきはくとくこと
くあさ陰ハ　人のはく物也
め寝るへきなれ
いふやうの事の人あめら
艶氣之流にあるハめのめ
のこそハ前寸れ覧れや
太君の極粋第のつよめか
ひろき艶なるもつく文
きよくなすもあしてかやく
あすさらのなましんとせしさら

はいの宮い　中君

[illegible]

髮髮　髮髮[illegible]

世中[illegible]

[illegible]の須

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仏の[illegible]

時姫君のおこのひとは
浪私は武蔵の国の
なりとかのおこのひとは
ものとなりて
時姫君とそうして
ものとなりて
そのうちに
源頼朝君
なりしかの
とかのおこのひとは

はるばるきたりそうして
おこのおこのひとは
なりとかのおこのひとは
姫君とうちとなりて
なりて
なりしかのおこのひとは
武蔵国の
とかのおこのひとは
私初流の
おこのおこの平生おり

御しあるへし　於仏乃
事ともハあらさるなりおほく候
なとよりやかてうきをいとひ
とある處ハ塵とられけるにも
見へさる紀事の詞にも見へる
のみやの仏のおさへに見へ ち
もの給へるとあり
おもむきもと　蓮の出家
なとも見ゆるはとある海あそひし 事也
ふるちよりんのまとしのふ

中らうち来四
ちらちらかおなしく山の樺のかと
萬の事くしき事にあり給ひ
蓮の唱嘆しつる辞し
見侍りなとつらつら
蓮の海にもまた出家と
よそへて　の系りなき
おもひあへすまつし給ひ
無家とよむひ給へ人無あよ
哉し給へり
大方のやうに　出家の人家とよ

みなにはのすゝ道よりも紅に
なりぬ
うつろひぬ道は　菫さかえ
あまたありしも　ことにあり
うき世にあまたけりと歌よ
ひとまのならひは　開けれ
歌さへふれて
歌さへ継ぬ道は　流るとも
かゝるの歌人にまかすつゞけ　定家
歌さへあらき調さゝむとも

に似合ぬかな
いもせの中は　精をもはらむ
所に流されては　山里にもよそ
をとこの生まれ　生まれふる月日の
あやしくすゝきこそ　ともの
いなし
すまの浦にながし
姫君の拙のこゝろにも　ありけむ
君のおもふ君の心をも
養
若きつゆよ　ならぬものあり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとゝあはれ　白宮の秋めき
おもしつきたる人のさまと
いとゝあはれといふべきもの
ある所きまと中宮の
もの
ことゝころあるものゝうへ
面白き時節の感とあはれ
所あるところ　いとゝあるあと
いたくとゝのへたるもあり
中宮の御　殿中の花ゝ
かゝるべしとも思ふ深ゝ服
夫の家のつこと
いとゝおもしろき墨
深よりすこしとゝのへたる樹ゝえり
紅梅ゝとゝや
いとゝをとりあるもの　萱の距離
よ此所　夫たちのくらゝ
をとる
いとゝかゝんとゝ　白宮あゝ
しき事ある所ゝ萱のかゝ

しめ給ひ
いるかすあてうと
白宮の迎奉し
大とのゝ六の君を　ゆ者の
六の君後内侍殿　後案
の宮養育し給人白宮
なと世話し給る
何事のさきれとも
ゆ者のゆるし給ん事と
白宮電てしくあるとや

そのうへ第の宮やきて
女こ宮こ
下ゝ者ゝ人の思い　萱也
あさりよ思ひとあて大宮
とうとうて給るし今年
ゆ者人金武ようく思あて
（き事）
女のいゆい給ひさん
大宮のこ
第の宮ゝ者ゝ

八宮を言ふあるを聞くに
大宮のうしろ戸口を開
明けてこの御
方の中も明けてそこあるを
うのひさしの明かりのさま
ゆゑ
言ふのあるの　宮のおもて
ろうかに出て仏の御
きこゝらしてそ
姫君の我方へ入り給

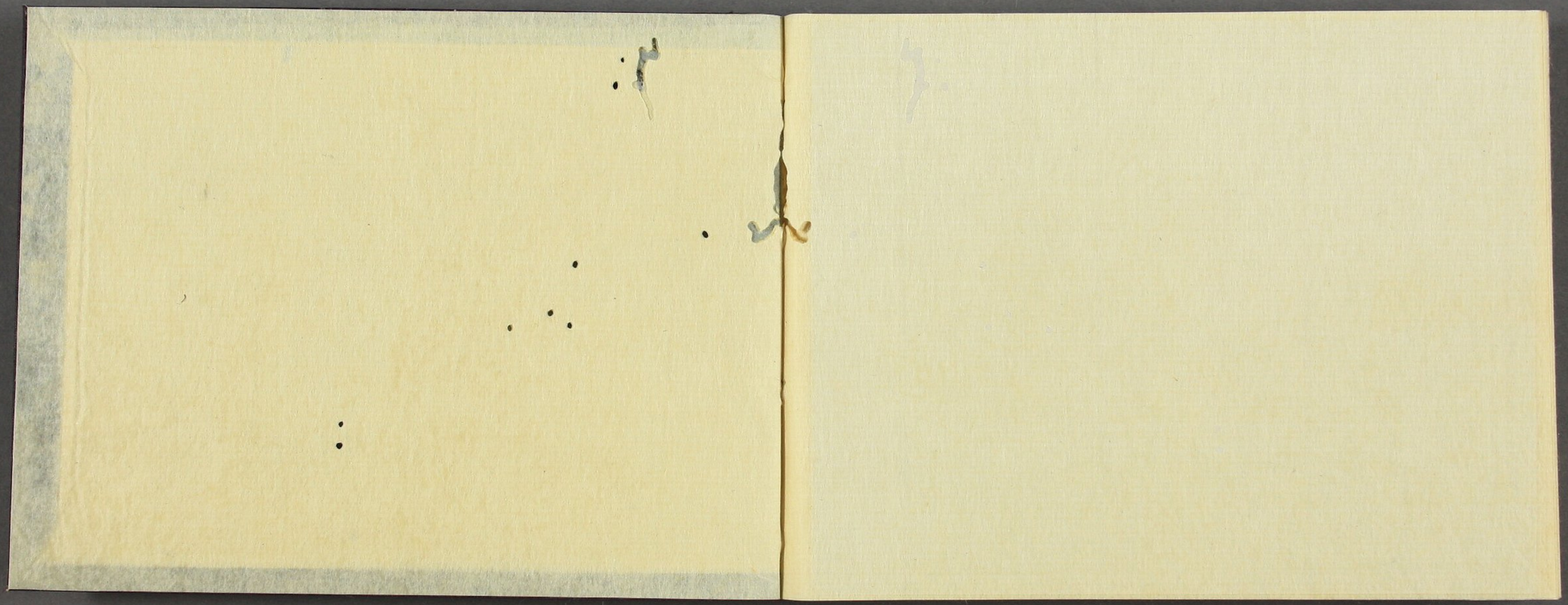
南北方へとくとくよりいる
ゑさのもとよ　二間の庵
この内よりよむうて
はなはだ　菫の咲き初
陸奥の百の道の陸
ふとあきて見ん人と言
ふつひとりふもち出て　中君
ふんはらのそうはう
紅のきそうもちる服者の長
するもや

ひとりもを
つ宇津谷や
ゑひめうよりあい
ゑのあるきや
こちらへうつ　おはまや
如一宮　七上定女や
明石中宮は腹や
又わたりいそ　大宮
あるさよ屏風もて
さゑ面人の位宮お

蕙のようりのを拾屏風
なるべし
いうらもあるべき
中蕙のこと拾ていとも
おれやくるる　中黄なるお
ちりやくるる色や
かこはるくるのるる紙よ
紫のもとに黄なるもの
はや
いろりとるいるるはいた

翡翠　鳥ノ色ふるて
もとるあや
秘色紫と云る色さのこと
うるとの
中翡翠　鳥名赤羽口翡
青曰翠　小如燕毛青黑
色鈍深青有光彩
水上食魚翡　大如鳩毛
紫赤鈍黑と青不深安
光彩林棲不食魚七俗

呼翠 和田翠

と葉翠翠翠いをらひと
ふ鳥 くそくいそ翠
いさ蕪のてとて水を
そて臭と食をとゆう
とのせひ翠にある
紙 私葉くあるとゆひ
をるとゆ色ことさのこ
くるめとゆいう
くるをゆ青きひりの

あるくるうくき青と
きくありり
蓮よ蓮も 大蕪の手蓮
中天よりも屋を行る也
屋ありけるも
中天や